東京学芸大学　高校探究プロジェクト
VOL.62-63　SEP.-OCT. 2026
COMBINED ISSUE

Let's TANQ便り

「探究2.0」共創実践コミュニティの拡大に向けたニュースレター



異なる専門性が出会うとき，集合知が動き出す

—鈴木朋子さんと考えた，多様性がつくるイノベーションと未来の学び—

10月9日（金），2週連続オンラインセミナー「未来を共創する高校教育」の第1弾として，株式会社日立製作所 研究開発グループ 技師長の鈴木朋子氏をお招きし，**「STEMからSTEAMへ」**をテーマにご講演いただきました。今回は，企業の研究開発における実践を通して考え，「探究2.0」が目指す多様性・対話・集合知・共創の可能性を探る機会としました。

複雑な社会課題に，どのように向き合うか

企業が未来を切り拓くためには，新たな価値を生み出すイノベーションが欠かせない一方，理工学的な技術だけでは解決できない社会課題が増えています。例えば，気候変動の問題一つをとっても，農業への影響や健康被害，エネルギー資源，地域経済など，さまざまな課題が複雑に絡み合っています。だからこそ，自然科学や工学の知識だけ（STEM）でなく，人文・社会科学やデザインなど，多様な専門性を持ち寄り（STEAM），社会課題を多面的に捉えることが重要になります。

講演では，脱炭素社会の実現に向けた取組を通して，技術的な検討に加え，行政や企業，市民など，多様な立場の人々との対話から解決の道筋を探る実践が紹介されました。また，AIによる未来シナリオの分析や，デザインの力を生かした将来の暮らしの可視化など，異なる専門性を組み合わせながら，**望ましい未来をともに考えるアプローチ**が印象的でした。

多様性が生み出す集合知と未来の可能性

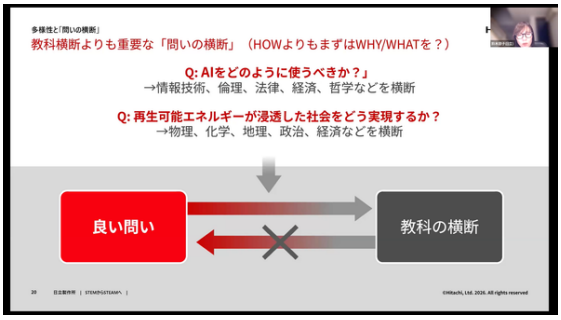
「多様性がないと集合知は発揮されない」。異なる専門性や経験，価値観をもつ人々が出会い，それぞれの知識や視点を持ち寄ることで，一人では気づかなかった課題や新たな解決策が見えてきます。そこでは，**多様な人々が集まるだけではなく，互いの考えを交わし，それぞれの専門性を生かし合うことが重要**です。

また，こうした多様性は，一人ひとりのキャリアの可能性を広げることにもつながります。鈴木氏は，大学生との対話を通して，研究職に対するイメージや文系・理系の枠組みに対する見方が変化した事例を紹介されました。異なる専門性や価値観との出会いは，社会に新たな価値を生み出すだけでなく，**一人ひとりが自分自身の可能性に気づき，将来の選択肢を広げる契機**にもなるのです。

教科横断よりも重要な「問いの横断」

鈴木氏は，**教科横断そのものを目的とするのではなく，その出発点となる「問い」の重要性**を強調されました。例えば，「AIをどのように使うべきか」「再生可能エネルギーが浸透した社会をどう実現するか」といった問いを追究するためには，理工学的な知識だけでなく，倫理，法律，経済，政治など，多様な分野の視点が必要になります。まず，「何を，なぜ問い，なぜ考えるのか」があり，その問いを追究する過程で，必要な教科の知識や方法がつながっていく。

この視点は，各教科の専門性を生かしながら，異なる視点との出会いを通して，問いを深め，新たな価値をともにつくり出す「探究2.0」にも通じるものでした。



参加者の対話から広がった気づき

講演後は，ブレイクアウトルームに分かれ，「これからの社会において，教科の学びにはどのような意味があるのか」「異なる専門性をどのようにつなぐことができるのか」をテーマに対話しました。高校生，教員等，大学関係者など，異なる立場の参加者が，それぞれの経験や問題意識を持ち寄りました。

事後アンケートには，**「イノベーションはスーパーマンから生まれるのではなく，色々な視点の衝突から生まれる」**という気づきや，「多様性を受け入れることはできていても，そこから新たな価値を創造するところまではできていない」という振り返りが寄せられました。

また，**高校生からは，自分が所属する集団の枠を越えた交流の大切さや，一つの教科だけでなく，さまざまな教科の視点から考えることで学びが面白く，深まる**という声もありました。

一方，教科間の連携の難しさや，教員の負担を踏まえてSTEAM教育をどのように実現していくかなど，学校現場の課題も共有されました。

異なる専門性を生かし合うためには，**教員自身も教科や学校の枠を越えて対話できる場が必要**であることを，改めて考えさせられました。

「個人の能力」から「関係性」へ ともに，違いを生かし合う「器」をつくる

― 勅使川原真衣さんと考えた，競争から共創への転換 ―

続く10月18日（日）の第2弾では，組織開発コンサルタント・著作家の勅使川原真衣さんをお迎えし，「社会という『器』をつくるための教育とは？」をテーマに，これからの学校や教育，社会のあり方を考えました。

高校探究プロジェクトが目指してきたのは，一部の生徒だけが取り組む**特別な探究ではなく，すべての生徒が目を輝かせて学ぶ瞬間をつくること**です。しかし，探究が高校教育に広がる一方で，「よい問い」「優れた探究」「目に見える成果」といった大人の評価基準によって，生徒の多様な興味や思いを狭めていないでしょうか。こうした問題意識から，今回は，個人の能力を伸ばすことだけでなく，多様な人々が互いの違いや持ち味を生かし合える「器」に目を向ける機会としました。

「個人の能力」から「関係性」へ―「器」という視点

勅使川原氏は，教育社会学と組織開発の視点から，私たちが当たり前のように受け入れてきた「能力主義」を問い直されました。

人が何かを「できる」「できない」ということは，個人の能力だけでなく，周囲の人々との関係性や環境によっても変わります。そのことをレゴブロックに例えて説明されました。同じピースを使っても，組み合わせ方によって異なる作品が生まれます。また，作品に合うピースだけを選ぶのではなく，一つひとつのピースを生かせるように，作品の形そのものを変えることもできます。

そこで**重要になるのが「器」という視点**です。「器」とは，関係性や役割，評価の仕組みなどを指します。人を決められた「器」に当てはめるのではなく，一人ひとりの持ち味を生かせるように「器」を柔軟につくり変える。こうした考え方は，学校教育においても，「この子は何ができるのか」から「どのような関係や環境があれば，この子の持ち味が生かされるのか」へと，問いの転換を促すものでした。

探究が能力主義の「着替え」になっていないか？

特に考えさせられたのは，探究の拡がりが，必ずしも能力主義からの転換を意味しないという指摘でした。**従来の学力による序列化が，「探究力」や「主体性」「自走する力」といった新たな評価の物差しに置き換わっているだけではないか**，という問いです。

そこで提示されたのが，**「探究＝問い×他者×変容」**という捉え方でした。誰が優れた問いを立てたか，どれほど立派な成果を生み出したかだけではなく，他者との出会いによって問いや見方がどのように変わったのか。その過程にこそ探究の価値があるという視点です。

さらに，**「弱さは，関係の中で機能になる」**というお話も心に残りました。「分からない」と言える人がいるからこそ，周囲の人が立ち止まって考えることができる。一人ひとりが何でもできるようになることを目指すのではなく，互いの弱さや持ち味を生かし合える関係性をつくることが重要なのです。

対談から広がった問い――大人自身の「当たり前」を問い直す

後半の対談では，西村リーダーから，探究に限らず，学校行事や部活動でも，教員自身が無意識のうちに望ましい生徒像や活動の「型」を求めているのではないかという問いが投げかけられました。勅使川原氏は，大人自身が予測できないことに不安を感じ，これまでの「うまくいった姿」を求めてしまうのではないかと指摘されました。

また，高校生からは，学校行事の運営を通して，個人の力だけでも，全員が一丸となるだけでも限界があると感じた経験が語られました。そこでは，**一人ひとりの異なる持ち味を生かす「分業」の大切さ**が強調されました。

Zoomチャットには，高校時代から本プロジェクトに参加してきた大学生からも，先生や仲間とともに悩み，対話を重ねながら探究してきた経験が寄せられました。**探究を通して育まれる関係性の大切さ**が，より具体的に感じられる時間となりました。

さらに，「うまくいかなかった」「分からなかった」という経験も大切な学びであるという議論も交わされ，成果だけでなく，**試行錯誤の過程や他者との関わり，相互変容に目を向けることの重要性**が，改めて浮かび上がりました。



参加者の気づきから，次の一歩へ

事後アンケートには，高校生，教員，指導主事，大学教員などからさまざまな回答が寄せられました。

「探究力」という新たな能力の物差しで生徒を評価していたことへの気づきや，「この子をどうするか」ではなく「どうしたらこの子が楽しめるか」という視点を同僚と共有したいという声がありました。

高校生からも，探究が発表を目的とした活動になっている現状を振り返り，他者との関わりによって，問いや見方が変わるプロセスを大切にしたいという思いが綴られていました。また，多様性を認めるだけでなく，自ら異なる考えの中に飛び込み，意見の違いを楽しみたいという声も印象的でした。

一方で，探究のプロセスを評価する際の公平性や教員の負担など，実践上の難しさも寄せられました。

理念を掲げるだけでなく，それを実現できる学校の環境や仕組みをどのようにつくるのか。参加者の気づきは，生徒の学びを支える「器」そのものを問い直すことへと広がっています。

「すごい」から「面白い」へ

今回のセミナーは，対話志向で他者に開かれた「探究2.0」の意義を改めて捉え直す機会となりました。他者との出会いによって，互いの見方が揺さぶられ，問いや関係性が変わっていく。そのような学びを実現するためには，生徒だけでなく，教員や学校もまた，自らのあり方や「器」を問い直し続ける必要があります。

12月20日（日）開催の「探究の共創 in Winter 2026」では，高校生の探究活動の経過報告をもとに，多様な人々が対話し，そこで生まれた気づきや変容を振り返ります。

「すごい」だけでなく「面白いね」と，互いの違いを楽しみながら問いを広げ，深めていきましょう。**他者との出会いを通して，問いも，自分自身も，そして「器」も変わっていく**。そんな共創の場を，皆さんとともにつくっていきたいと思います。

多くの皆さんのご参加お待ちしています！



〒184-8501
東京都小金井市貫井北町4-1-1　東京学芸大学 高校探究プロジェクト
TEL：042-329-7927　E-Mail：g-tanq@ml.u-gakugei.ac.jp　URL：https://g-tanq.jp/